

2023年3月22日

公益財団法人 笹川平和財団
中東イスラム事業グループ 御中

東京外国語大学国際社会学部
南アジア・ウルドゥー語専攻 3年 古田花梨

2023年度イラン短期研修プログラム報告書

1. 概要

2023年2月23日から3月7日の間、笹川平和財団、外務省付属の国際関係学院（以下、SIR）のご支援の下、日本人学生計9名でイラン・イスラム共和国（以下、イラン）にて短期研修プログラムを行った。研修の前半ではテヘランに滞在し、SIRにて日本人学生によるプレゼンテーションや、SIRの教授陣による講義、イラン・イスラム共和国中央銀行（CBI）への訪問などを行った。後半ではイスファハーン、ヴァルザネ、カーシャーンといった地方都市を視察し、各地の料理や風土を堪能した。

2. イラン市民の現情勢への認識

SIRでの講義や、学生の発言などから、イラン市民が国内情勢をどのように見ているのかを3つの側面から分析した。

(1) 経済から見る対米感情

現在イラン経済は芳しくない。そこには、イランがアメリカから経済制裁を受けていることが少なからず関係している。しかし、イラン市民が不況の原因をアメリカのみの責任としているのかといえば、そうとは限らない。SIRにてイラン経済の講義を行ったDr.Shahabi氏は、イラン経済が低迷している原因をアメリカの経済制裁と、イラン政府のミスリードの両方に見出していた。テヘランを案内していただいたSIR卒業生が働いているシンクタンクを訪問した際は、イランの不況の原因をアメリカの経済制裁のみに集約させて話していた教授の意見に、若いシンクタンクの職員が、イラン政府にも責任はあると反論していた。また、今回研修のコーディネートを担当していただいた穴田慶子さんによれば、イラン市民は経済不況の原因は自国の政府にあるとの見方もあるという。

しかし、アメリカがイランに経済制裁を行っていることは事実であり、それがイラン経

済に悪影響を与えているのもまた事実である。ではイラン市民はアメリカを憎んでいるのかというとそうではなく、むしろ憧憬に近いものを感じた。本報告書を執筆するにあたり、2019年度のイラン研修に参加した方のレポートの中には、SIR 学生がいかにも反米的であるかというのが述べられていた。しかし今回の研修では反米的な側面は一切感じられず、アメリカへの責任追及や、アメリカの同盟国である日本への批判などは一度も聞かなかった。むしろイラン市民はむしろ好んでアメリカ文化を受容しているように思う。例えば街中にはケンタッキー・フライド・チキン (KFC) をまねた ZFC (写真①参照)、や、サンドイッチ専門店である SUBWAY をまねた FreshWay (写真②参照) や、Sublime というチェーン店が存在した。イラン政府はインターネットを遮断しインスタグラムの使用を制限しているが、多くの SIR 学生はインスタグラムを使用しており、また、訪問した Milad Tower では、公式アカウントのフォローを促す広告 (写真③参照) までみかけた。このように、イラン市民の生活にアメリカ文化は深く根差しているのだ。穴田さんによると、多くのイラン人は欧米での生活を夢見ており、アメリカ文化とは憧れの対象だという。私はイランと同様にアメリカからの経済制裁を受けているキューバへ 2022 年の夏に渡航したが、そこでもイランの若者と同じようにアメリカを憧れの対象と見ている市民が多かった。インターネットの発達により外国の状況が手に取るように分かるようになった現代で、政府の意向に関わらず、若者の中では世界のトレンドの最先端であるアメリカは憧れの対象なのだろう。

<参考資料>

写真①

写真②

写真③



(2) 国際社会でのイメージ

イランが世界で危険なイメージを持たれているというのはイラン市民も周知であるらしく、SIR の教授が「イランに来ることに反対した親もいるだろう」と私たちに問いかける場面もあった。SIR で外交を教える Dr.Sajjadpour 氏はそのようなイメージの改善を訴え、また、イランの印象は世界のメディアにより歪められていると主張し、私たちに正しい理解

をするよう促した。例えば、イランが西側諸国から危険視されている原因の一つに核開発がある。しかし彼は、批判する前にイランの置かれた状況を理解してほしいとも言っていた。イランは世界で二番目に隣国が多い国であり、言い換えれば自国のセキュリティを侵害される危険性が非常に高い国である。それゆえ核開発をして、セキュリティを嚴重にしておかなければならない。イランを危険な国だとして色眼鏡をかける前に、イランがそうせざるを得ない国であるということを理解してほしいと彼は語った。彼の意見を身勝手な暴論だとするか切実な訴えだとするかは個々人の自由だ。しかし、隣国がおらずアメリカの核の傘に守られていながらも唯一の被爆国として核兵器廃絶を訴えている日本よりよほどイラン市民は核の危険性を熟知しているのではないだろうか。

また、イランがロシアに武器提供を行っていることが各国のメディアで批判的に述べられていることに対しては、「イランはただ武器を売っているだけで、それをロシアがウクライナへ残虐な攻撃するのに用いていたとしても、イランに一切の責任はない」と述べていた。これに対して私は、未来の外交官を育てている立場である彼が、外交と経済を別々に考えていることに私は不安を覚えた。経済面でロシアと深く結びつき、外交面ではロシアとは切り離して考えてほしいというのは国際社会では通用しない。実際授業後に、彼の意見は利己的だとして批判する日本人学生もいた。イランが危険視されているという客観的な視点を把握してはいるけども、その理由は自国にはなく他国の報道姿勢にあるという他責的な外交姿勢を変えない限り、いくらイラン市民が国際社会に目を向けるようになっても、イランが危険視される状況は変わることはないのではないだろうか。

3. 女性の選択

日本人女性にとって専業主婦とはぜいたくな存在となった。日本では物価上昇と人手不足の影響で、結婚後も女性が働くというのが一般的になってきている。女性が望んでいるわけではなく、そうしなければ生活できないからだ。しかしイラン人の女性は大学への進学率は高いけれども、卒業後は就職をしないで家庭に入る選択をする割合が高いという。また、就職をし、産後会社がポジションを残していても、育児との両立を負担に思い、会社に戻らない選択をする人が多いという。イランの価値観で母親が高学歴の方が子供に良い教育を受けさせることができると考えられているため、はなから就職する気がなくても女性は大学進学を目指すのだと CBI の担当者は語った。女性に勉学をさせることに否定的というのがイスラム教のイメージだったので、これは意外であった。女性の就職率について語った男性たちに、なぜ女性が家庭に残る選択をするのかという質問をすると彼らは「家の方が好きなんだろう。」と極めて曖昧な憶測しか持ち合わせていなかった。男性が育児に協力的でないがために女性が家庭に残らざるを得ない可能性を感じ、CBI で働いている女性に質問すると、「家庭によって夫の育児協力の差に度合いはあるが、今は夫婦二人で働いていてもインフレによる物価高の影響で二人が子育ての限界だ。」との返答をい

ただいた。日本でも昔は女性がキャリアをあきらめ家庭に入ることが一般的であったが、現在では育児と仕事の両立を求められている。イランも専業主婦が贅沢だと感じる時代が訪れるかもしれない。

3. イラン人の宗教観

最後に、イラン人がイスラム教をどう捉えているかについて述べようと思う。昨今報じられているスカーフデモの影響もあり、街中ではヒジャブをしない女性は珍しくなく、そのほとんどが若者であった。SIRの食堂では毎朝アザーンが流れていたが、私のいたタイミングではお祈りをする人を見かけなかった。イスラム教では犬は不浄な生き物とされているため、イランで犬を飼うことは取り締まりの対象になるのだが、犬を散歩させている人を見る機会も少なくなかった。これらの事実を見ると、イランでイスラム教は形骸化したようにみえるがそうではない。彼らの大部分は神を信じており、「神の思し召しがあれば」という意味である *enshallah* という単語は一日に何度も耳にした。Imamzade Saleh's Shrine では今でも自分の願いが叶った人がそのお返しに人々にお菓子を配るという古くからの風習を見ることができ、神への信仰心を忘れていないことがわかる。イラン人にとって宗教とはなにをしてはいけないかが決められているフレームワークのようなものであり、彼らの人生から外すことのできないものである。

6. おわりに

イランで女性のスカーフ着用に反対するデモが勃興している中、現地へ出向き、たくさんの若者と話をすることができた今回の研修は非常に貴重な体験となった。企画して下さった公益財団法人笹川平和財団や SIR の皆様に心から感謝を申し上げる。

(なお本所感は、執筆者個人の見解です)